

## 大会印象記もどき

古川 彰

その日のうちに京都まで帰りつかねばならない都合で、二日目午後の討論を聞かずに帰る僕のカバンは、一キログラム以上もある報告資料でふくれ上っていた。二日間、九つの自由報告と三つの課題報告は、それぞれ熱っぽく重要な報告であったにもかかわらず、いくつかの印象的な報告を除けば、今の僕にはどれがどの報告だったのかの区別もつけ難い。正直に言ってしまうえば、つまらなかつた。今、報告資料を繰ってみても、この報告でのポイントは何だったのか、結論は何だったのか思い浮んでこないのだ。

私がこの大会に出席させていただくようになってから五年がたとうとしている。いつも、大会では、他の学会で味わうことのできない刺激を受け、興奮を覚えてきた。各報告者の長期にわたるフィールドワークによって培われた密度の高い実証——重い実証——が、たいへんな迫力で僕をフィールドへ駆りたててくれた。実証研究の「重さ」「怖さ」をいやというほど教えられてきた。村研大会は僕のフィールド・ワークのエネルギー源だったように思う。

年経て今、僕はどうしてつまらないのか。

大会印象記を書くチャンスを与えられたことに感謝して、この「つまらなさ」の要因を考えてみたい。

年々の村研大会の課題を追ってみる。二六回大会からは「農村自治」(二六、二七、二八回)、「農村計画」(二九回)、三〇回記念大会を経て、三一回の今回の「農政と村落」という三つの大きなテーマが続いた。これらのテーマが追求しようとした問題は、大きくは、農業および農村の国家的再編過程における農民・農村の対応の問題であった。課題報告はもとより、多くの自由報告もその課題を多かれ少なかれ念頭に置いたものであった。

テーマそのものへの興味はともかくとして、村研大会では、そうした課題に対して社会学・経済学・歴史学などの諸々の分野からアプローチし、議論するのが大きな魅力であったろう。しかも、その報告は、資料集収における各分野の立場を明確にしつつも、一つのテーマに関心を収斂させていくところに特徴と魅力があったと思う。しかるに現在、あの重い重い資料の自身はどうか。

有賀喜左衛門は昭和十八年の大著において次のように述べている。「特殊科学においては、その資料はいかにして獲られるかというに、一つの特殊科学にとっては、すべての生活事象がその資料となるのではない。資料という時それはすでに一つの科学的立場に編入された意味を持つ」と。きわめてあたりまえのことではあるが、学際各特殊科学の立場をふまえてはじめて成立するものであろう。

もちろん「村落研究学」という一つの立場があり得ないとは思はない。だが、しかしその為には明確な方法論が必要であらうし、今、自分の立場をそのように定めるなら、報告において、その立場からする方法論上の議論は当然あって然るべきだと思ふ。

僕の知る限りにおいて大会で、方法論にかかわる議論は正面切つてはなされてこなかった。今回、松田報告が方法論上の議論を提示

していたことは、ここ数年の報告に照して刮目すべきことだと思ひ、また、磯辺報告において、きわめてオーソドックスに農業経済学の立場から、村落研究への糸口を提示していたことが、逆に新鮮な驚きであつた。

これまで村落研究の大きな魅力であつた「重い実証」報告より、それら二つの報告に魅力を感じる。逆に、「重い実証」報告が「つまらなさ」の要因になつてゐるかのようである。

なぜか。また有賀は言つてゐる。「このような本質（資料集収が特殊科学の立場に立つて行なわれねばならないこと——古川）を無視して行なわれる採集記録は、その立場で茫漠広汎であるから、そのままでは科学研究の資料となり得ない。これを真の資料とするには、何らかの科学的立場においてさらに選択し、再編成が行われねばならない。」と。

一九七〇・七一年に村研大会では「村落研究の方法」がとりあげられ、それから十余年、我々が村落の本質論や存在論を問題にするのであつても、また、その変動を問題にするのであればなおさら、有賀の言ひ特殊科学の立場を再吟味し、方法論の再検討を行なわなければならぬところに来てゐる。そのことをひしひしと感じさせる大会であつた。

村研の特徴である「重い実証」と方法論の検討とは、ともすれば別のもつと考へられがちである。しかし、村研が諸分野の人々を集めて、意味ある学際的な大会を続けようとするのであれば、実証と方法論についての議論の両者をうまくかみ合わせていくのでなければならぬ。そうでなければ、各分野が個々バラバラの議論を展開するか、焦点を見失つた他分野への野合が行なわれることになる。

大会印象記にならないままに紙数がつきようとしてゐる。さて、「つまらなさ」の要因は？。もしかすると、自分をタナに上げて批判してゐる自分自身の中にあるのかもしれない。しかし、あの氣迫に満ちた、実証の重さをひしひしと感じさせる報告に励まされてきた若い世代の一人が、今、このように感じていることも事実なのだ。こんな思ひは僕だけのものなのかどうか。